

〈幼児教育〉

喜んで話したり聞いたりし、言葉で表現する楽しさを味わうための援助の工夫
～生活の場면을捉えて～

宜野湾市立嘉数幼稚園 比嘉 恭子

目次

I	テーマ設定の理由	1
1	研究の視点	1
II	研究の視点	1
III	研究の方針	1
IV	研究構想図	2
V	研究内容	3
1	幼児が喜んで話したり聞いたりすることとは	3
2	生活の場면을捉えるということとは	3
3	幼児期の発達の中のことばについて	3
(1)	ことばの発達過程について	3
(2)	一次的ことばとは	3
4	言葉によって子どもに育つものとは	4
5	言葉と環境の関連について	5
(1)	言葉の生まれる環境について	5
(2)	人的環境としての教師の役割	5
(3)	幼稚園の生活の中で考える言葉（生活の場면을捉えて）	5
VI	指導の実際把握	8
1	研究の具体的な取り組み（検証保育までの流れ）	8
(1)	学級の実態	8
(2)	言葉に関する保育の年間指導計画の作成	8
(3)	幼児の様子と教師の願いの作成	8
(4)	言葉の指導の意義	9
(5)	保育計画	10
2	検証保育指導案	11
(1)	幼児の実態	11
(2)	「クラスのひととき」について	11
(3)	保育の視点	11
(4)	表 8 言葉に関する保育の年間指導計画	12
(5)	表 9 週案	13
(6)	表 10 一組の生活プラン	14
(7)	表 11 一日の生活の流れの中における言葉の指導	15
3	検証保育を終えて	16
4	事例を通して	17
VII	研究の成果と課題	20

〈主な引用文献と参考文献〉

〈幼児教育〉

喜んで話したり聞いたりし、言葉で表現する楽しさを味わうための援助の工夫
～生活の場면을捉えて～

宜野湾市立嘉数幼稚園 比嘉 恭子

I テーマ設定の理由

中央教育審議会答申（平成 17 年 1 月）は、今後の幼児教育の方向性について 2 つの提言をしている。「家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進」と「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」である。つまり、幼稚園においては教育機能を拡充し、小学校教育との連携・接続の強化を図り幼児期の特性を考慮しながら、児童期へとつながっていく学びの基礎を築くことが必要となる。

幼稚園において培われるべき学びの基礎になるものの一つに、「幼児が教師や友達の話聞いて、伝え合う力を養うこと。」がある。幼稚園教育要領の幼稚園の教育の目標において、「日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること。」とある。人の話を聞く楽しさを十分に味わい、自分の考えを自分なりに話す喜びを味わうことで、幼児の体験や言葉が豊かになり、ものの見方や思考する力は養われていくのである。

私のこれまでの保育実践を振り返ってみると、聞く楽しさを十分に味あわせていないために、教師や友達の話に興味を示さない子もいたように思える。また、帰りの集いなどで、その日一日を振り返り自分の経験したことや発見したことを言葉にして、友達に伝えることが苦手な子への対応についても不十分であったように思う。私が子どもに語りかける時の話題の設定や、話し方などを含めての援助のあり方を、考えさせられる場面が多くあった。幼児の生活の中でおしゃべりを含めて話すことや、様々な人の話を聞く場面は多くあるが、私の中にしっかりとした幼児理解や発達段階を踏まえてのねらいがないために、幼児の言葉を育てる活動がうまくいっていなかったと痛感している。

幼稚園において子どもの言葉を育てていけるように、安心して自分なりに話すことができる関係を築き、生活の中で心を動かし言葉で伝えたいような体験を豊富に持てるようにしたい。さらに、幼児が人の話を聞くことによって気持ちが通い合い、自分の言葉で表現する楽しさが味わえるような機会を多く持てるようにしたい。

そこで、幼稚園の生活の中で「聞くこと、話すこと」という場면을丁寧に捉えながら、喜んで話したり聞いたりするための手立てや、楽しんで言葉で表現できる子の育成を目指していきたいと考え、本テーマを設定した。

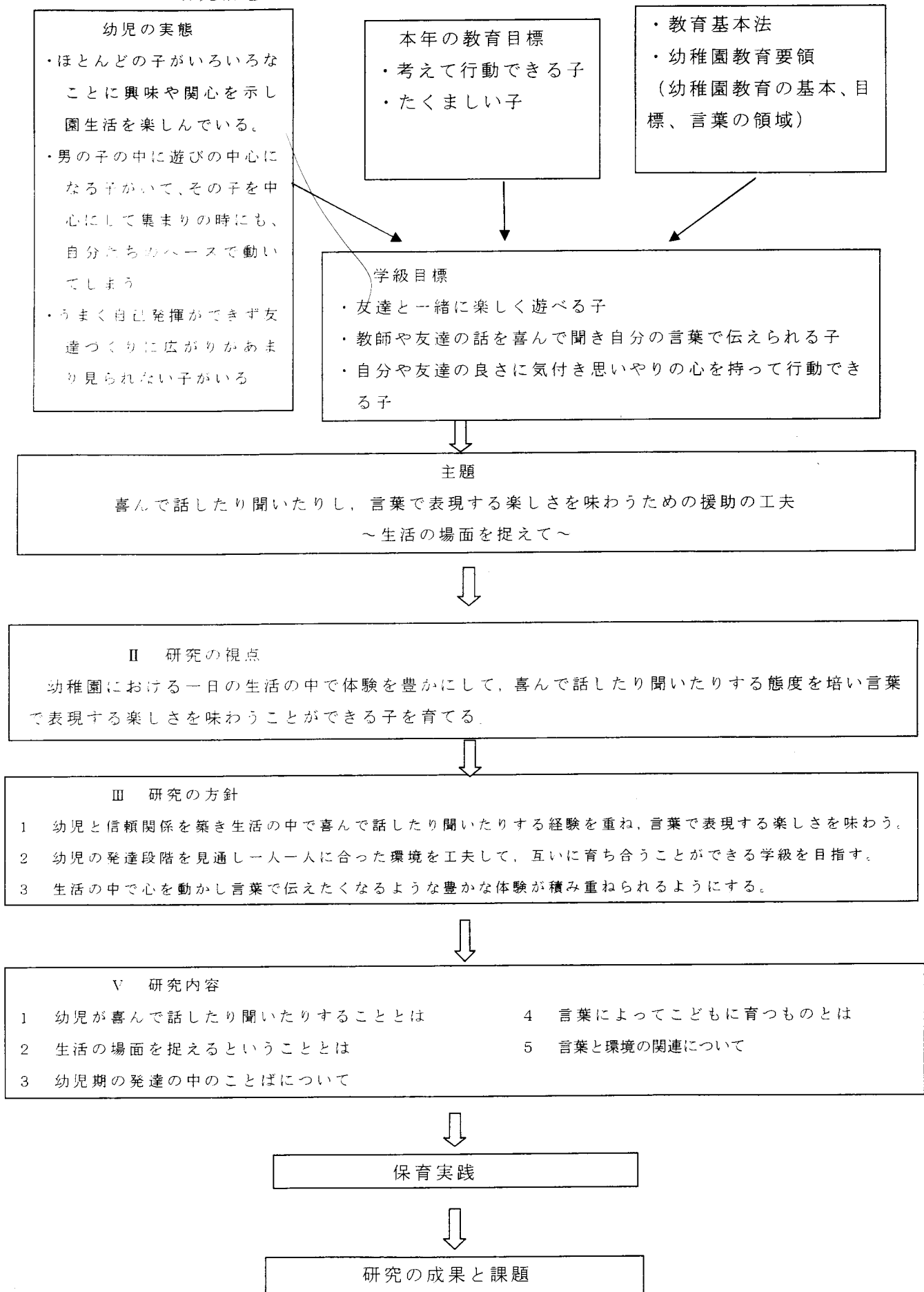
II 研究の視点

幼稚園における一日の生活の中で体験を豊かにして、喜んで話したり聞いたりする態度を培い言葉で表現する楽しさを味わうことができる子を育てる。

III 研究の方針

- 1 幼児と信頼関係を築き生活の中で喜んで話したり聞いたりする経験を重ね、言葉で表現する楽しさを味わう。
- 2 幼児の発達段階を見通し一人一人に合った環境を工夫して、互いに育ち合うことができる学級を目指す。
- 3 生活の中で心を動かし言葉で伝えたいような、豊かな体験が積み重ねられるようにする。

IV 研究構想図



V 研究の内容

1 幼児が喜んで話したり聞いたりすることとは

幼児は信頼できる教師に暖かく見守られ、積極的に園生活を送る中で、発達に必要な経験を得ることができる。そこで、幼児の内面に起こる様々なイメージや感情、思考が音声で表出され言葉になる。従って、言葉とは幼児の内面を映したものとなる。それを教師や友達がしっかりと受け止めることによって、言葉だけでなく自分も大事にされたという嬉しさが、伝える喜びに繋がっていく。このような、幼児が安心して話すことのできる信頼関係が基になり、教師や友達の話しに興味や関心を持ち、主体的に聞くことができるようになる。幼児が喜んで話したり聞いたり、言葉で表現していくことで、教師や友達と互いの考えや気持ちを共有し、人間関係や遊びが広がっていく。また、豊かな人間関係や遊びによって幼児の言葉も豊かになっていく。

2 生活の場面を捉えるということとは

幼児期は自然な生活の流れの中で直接的・具体的な体験を通して人間形成の基礎を培う時期である。幼稚園では教師と友達と共に生活をしながら、様々な場面で言葉のやり取りが行われている。言葉によって相談したりしながら生活の流れが分かり、幼児自ら生活をつくっていく。幼稚園教育は一日を単位として、登園から降園までの生活が教育的に意義のあるものでなければならない。幼児に自分の思いや考えを自分の言葉で表現して、相手の話をしっかりと聞こうとする心情・意欲・態度が育つために為に、幼稚園の毎日の生活の中で、総合的に指導することが必要である。

3 幼児期の発達の中のことばについて

(1) ことばの発達過程について

幼児期は様々な領域や機能が関連して総合的な発達が見られる。幼児のことばは誕生から数年の間で会話ができるまで、どのような道筋をたどるのか、岡本夏木(2005)の『幼児期』から、ことばの発達過程を図のようにまとめてみた。表1からすると、5、6歳児は「ことばの生活化期」になる。また、この時期のことばは「一次のことば」(やりとりことば)と呼ばれる。

表1 ことばの発達過程

ことばの胎生期	乳幼児期	ことばの獲得にとって不可欠な必要条件となる対人交渉機能や象徴機能の基礎ができ上がる。
ことばの誕生期	1歳半ば頃から 2歳過ぎ	自らの力と周囲の人たちの共同作業によって、ことばを生み出してゆく。
ことばの生活化期	2歳半ば頃から	子どもは身につけたことばを積極的に使いはじめ、生活をことばで現していく。(やりとりことば=一次のことばによって言語活動が行われる。)
ことばの自律期 (ことばのことば化)	小学校の中頃から	ことばと結びついていた具体的状況から離れて、不特定多数の人にむけての表現手段として使うことが可能になってくる。ことばの意味をことばでもって説明できるようになる。書きことばの使用も重なる。(二次のことばによって言語活動が行われる。)

(2) 一次のことばとは

幼児のコミュニケーションの大きな特徴は言語活動が、相手との「ことばのやりとり」の中で展開されるとして、それを、一次のことばとしている。岡本夏木(2005)

は一次的ことばの性質を以下のように示している。

表2 一次的事ことばの性質

ア	生活を共にし、経験を共有する特定の親しい人との間で行われる。
イ	テーマは具体的、直接関係することや物についてである。
ウ	対面して話し手や聞き手が役割を交換しながら行われる。
エ	伝える相手が親しい人だったり、身近な人なので、ことばの文脈だけではなく、その状況も受け取ることができる。文法的に不十分であっても要点は伝わる。 (例) ケーキを食べて「おいしい」という言葉を、その子が食べるのをどれほど楽しみにしているのかなどを知っている上で、「おいしい」の意味をとらえる。

一次的事ことばを使いことばで生活する基礎を固めていく活動を経て、二次的事ことばへ以降していく。二次的事ことばとは小学校以降に現れ、文字など使用が出てくる。一次的事ことばが身近な人との間で行われるのに対して、二次的事ことばは直接交渉のない不特定多数の他者や自分の中に聞き手を想定して話されることがある。

以上のことを踏まえて、幼稚園において幼児が実際の経験や活動を通し、教師や友達と対話をしながら話し言葉を充実させていくことが、5、6歳児の言葉の発達を図る上で重要であることが分かる。

4 言葉によって子どもに育つものとは

言葉を獲得することで子ども達がどのような能力を得るのかを、横山(1979, 1994)、芦田(2003)、今井和子(2000)を参照してまとめた。

表3 言葉の機能

1	コミュニケーションの手段としての言葉
	言葉を伝え合うことによって、自分や他者の欲求、要求、感情、考え、経験や知識を伝え合うことができる。
2	認知の手段としての言葉
	言葉を用いて何かを「知ること、理解すること、考えることを行うこと」ができる。とくに抽象的な思考は言葉なしには不可能であるといつてよい。
3	行動をコントロールする手段としての言葉
	(例)「コワクナイ、コワクナイ」、「ダイジョウブ、ダイジョウブ」などの言葉を自分に語りかけることで自分の恐怖心をしずめ、自分を勇気づけ、自分で行動をコントロールすること。
4	自己表現の手段としての言葉
	自分の思いや要求を表現することができる言葉
5	物事の原因や背後にあるものや事柄を探求する力(思考を深める言葉)
	言葉を用いて考えることによって、ものの考え方が豊かになる。
6	自我の形成としての言葉
	上記の働きを統合した働きである。コミュニケーション能力、そして、自分を取り巻く社会を認知する能力、そして、自分をコントロールする能力を身につけることにより、行動の場が広がっていく。その過程で得た知識や他者との会話によって、自分と他者との違いが分かり、自我、アイデンティティーが形成される。

また、コミュニケーションを行う時に相手に話す言葉は他者だけでなく、自分にも向

けられる。自分の言葉で自分の気持ちを再発見したり、心の中で言葉を用いて思考を深める言葉（内語）の発達につながっていくことが、5、6歳の言葉の発達で期待されることである。また、自分に言葉で語りかけることにより「○○みたいになりたい。」「○○ができるようになりたい。」と働きかけるようになり、自分で行動を統制するようになることも幼児の育ちとして重要である。

5 言葉と環境の関連について

(1) 言葉の生まれる環境について

幼児は身近な人やものや自然などに、興味や関心を抱き主体的に関わりながら望ましい経験をしていく。その中で言葉で伝えたり考えたりすることを通して、言葉を獲得していく。そのやり取りは一方的でなく、柔軟に変化し幼児の興味や関心に応じて必要な刺激が得られる、応答性のある環境が必要であるとされる。高杉自子（1992）によると自然環境はきわめて応答性の深いものであるとし、幼児のことばを導き出す源泉であるとしている。「美しさや素晴らしさ、威大さは感動を呼びおこす。しかも心を寄せた時、応答が返ってくる。人間の思い通りにならない応答性を持っているのである。」とある。幼稚園生活で幼児が積極的に、自然に働きかけるように環境を構成していきたい。

(2) 人的環境としての教師の役割

幼児は保護者や教師などの親しみをもっている大人の行動を模倣したり、教師が関心を持っているのは何か、教師の視線の先にあるものを見ようとする。従って、教師が生き生きと自然環境に関わったり生活を楽しむ様子を見て、幼児の興味や関心も広がっていく。また、教師が一人一人の言葉を大事にする姿勢を見せることは、幼児にも伝わり他児への思いやりにも繋がっていくことになる。

① 教師の言葉や話し方

教師自身の言葉や話し方も幼児の言葉の育ちに大きな影響を与えている。子ども達と幼稚園の生活を送りながら、美しい日本語で生き生きとした言葉で表現をしているか、形式的な言葉ばかりになっていないだろうか。子どもを褒める時にも「凄いね。」だけで、どんなところが工夫されているのかなどを含めて多様な表現ができるようにしたい。また、子ども達に話しかける時に、ざわざわとしても構わず話し続けたり、大声になってしまうと子どもも教師と同じ話し方をするようになってしまう。メリハリがあり、対象を考えて声の大きさなどを調節するなど話し方を工夫し子どもの話し方のモデルになるようにしたい。

② 教師の話を楽しんで聞くようになるために

「どんな話だったらよく聞くのか」と考えて、話しを聞くことは楽しいことであるという経験を幼児に味合わせるようにする。そのために、教師は話す技術を工夫する必要がある。子ども達の発達段階を押さえて負担にならない時間で、興味関心のある内容を考えて話しをする必要がある。新学期から短い話しを折りに触れて聞くことを積み重ね、幼児の聞く態度を養うようにする。

(3) 幼稚園の生活の中で考える言葉（生活の場面を捉えて）

私が保育実践の中で何気なく行っていた、幼稚園の一日の活動を見つめ直して、どのような目的を持って関わっていくかを考え、実践していくようにしたい。

① あいさつ（生活に必要な言葉）

あいさつは集団生活を円滑にするために必要な言葉である。しかし、言葉だけ

を先行して身に付けさせようとしても、子どもにとって実感のない言葉になってしまう。子ども達が主体的に豊かな経験をする過程の中で、生活の仕方と共にあいさつが身に付くように働きかけていきたい。

あさの出会い

「おはよう」と交わすことによって、お互いを親しい関係であると認めて、出会いを喜ぶ気持ちを分かち合うことができる。まずは、幼児と親しみの気持ちをもって、あさの出会いを迎える関係をつくりたい。教師が微笑みと共に、今日も元気に来てくれて嬉しいという気持ちをこめて「おはよう」とあいさつをするようにする。そうして、子ども同士も自然にあいさつが交わされるような雰囲気づくりに留意していきたい。

帰りのあいさつ

日頃の「帰りのひととき」の時間は帰園時間がまじかに迫り、教師も子ども達も慌しい気持ちで流れてしまうことが多い。教師も気持ちの余裕がないために、帰りの準備を急かし、「早くしてね。帰るの遅くなってしまうよ。」と子どもを追い立ててしまったりする。早く帰りたいという気持ちで、そわそわしている子もいる。さよならのあいさつが揃ってできないと、「ちゃんと、あいさつできるまで帰れないよ。」と脅かす言葉さえでてきてしまう。そんな風にあいさつをしてしまった後は、終わる否や、子ども達はお互いの顔を見ずに部屋を飛び出していってしまう。

帰りの時間は「今日の楽しかったこと」や「明日への期待」などを一人一人の幼児に伝え、互いに心を通わせあいさつを交わす場にしたい。ゆったりと帰りの時間を迎えるために、日頃の生活の流れを見直し、時間配分に気を付けることが必須である。「さよなら」のあいさつは「今日も一緒に遊んでくれてありがとう。明日も一緒に遊ぼうね。」という気持ちを込め、互いの表情を見ながら落ち着いた気持ちで行うようにしたい。また、そうすることが幼児の気持ちが安定し、安全な降園ともつながる。

食事の時のあいさつ

これまで食事の初めのあいさつは当番が声を揃えて、「用意はいいですか、お口はチャック、手はおひぎ、ごあいさつ、どうぞめしあがれ。」と先行し、その声に続き全員が「いただきます。」というような、やり取りを多く行っていた。終わりは「静かにしてください。お口はチャック、手はおひぎ、ごちそうさま。」と毎日同じように繰り返すことによって、習慣として定着すると私自身考えていた。しかし、子ども達は教師や当番の合図がなかったらあいさつをすることができなかつたり、どの場面でも同じあいさつを繰り返す姿がみられた。いわゆる「となえ言葉」では子ども達の主体性を感じることはできない。型にはまった不自然なあいさつでいいのかという疑問も沸いてきた。

幼児が教師や友達と一緒においしそうな食事を頂けることの喜びを感じながら、「いただきます。」を言う時の表情は生き生きとしている。「ごちそうさま」の言葉も、作ってくれた人の顔を浮かべながら「ありがとう」という気持ちがこもっていたり、「おいしかったけど、少し残してしまった。ごめんね。」の意味も含まれていたりする。あいさつをする時の心情は一人一人違うのかもしれない。あいさつをすることによって、相手と心の中で会話をするように繋がってほしい。

② 友達との会話から

～ミルク給食の時の会話から（5月）～

友達とテーブルを囲みミルクを飲みながら、T君が「むげんたいすうって、よくばりだよね。」「だって、おかしだったらすごいいっぱいでしょう。」それをきいて、S君が「むげんたいすうって、うちゅうくらいおおきい。」「おれだったら、あんなにおかねがあったら、3かいだてのいえをたてる。」「そのために、いまおかねをためて、おかあさんたちにあげる。」ミルク給食やお弁当の時間は友達と顔を合わせて座るので色々な会話が生まれる。友達と楽しいおしゃべりの中で、お互いの家族の話をして親しくなったり、遊びの約束をしていたりする。「話す声は大きすぎないかな。」などと、他の友達も快適に食事をするための配慮ができるようになることを期待して、おおいに会話の時間を楽しんで欲しい。

③ 遊びの中で

ごっこ遊び

3～4人の子どもがままごとをしていて、その様子を見ていたA子が教師に「Aもやりたい。」と訴えにくる。そういう時に「入れてっていつてみてごらん。」など、言葉で簡単に関わり方を教えていた。しばらくすると「入れてって言ったのに、入れてくれない。」という訴えになる。「じゃあ、先生と一緒に言ってみよう。」ということで、遊んでいる子ども達に「Aちゃんもやりたいんだって、一緒にさせてあげて。」という具合に解決してしまう。でも、せっかく、遊びに入ったA子は楽しめずに抜けてしまう。教師もA子もままごとをしている子の遊びをよく見ていないので、イメージがつかめていないのである。「入れて」という言葉を使えば、友達と遊び込むことができるわけではない。教師自身もそこでの遊びはどんなイメージで行われているのかを見るのが大事である。「入れて。」「いいよ。」と返事をもらって遊びが始まるのではなく、「どんな遊びしているのか見せてもらおうか。」と子どもとお客さんになるなど工夫し、柔軟な関わり方を示すようにしたい。

④ 「クラスのひととき」において

話し合いの場面

運動会やお遊戯会などの行事の前に、どのように進めて行きたいかなど子ども達と話し合いをすることがある。普段の生活においても、お当番の仕事についてや、片付けについてなども話し合いをすることがある。しかし、教師が一方的に進めてしまい、話し合いの内容について興味を持っていなかったり、何をしているのか理解していない子も見られる。

桐朋幼稚園の教育「生活する力ーその育ちの追求」の中に、「何でも話しあえば、相談させれば、というものではなく、子どもの発達の状態を十分に把握した上で子どもたちが興味を持ち、考える必要を感じ、理解できるような質や量を検討しておくこと、話しあい、相談することによって、一人ひとりの子どもが育つことを考えていかなければならない。」としている。子ども達が自分達の生活を良くするために、話し合う必要があると思えるようなことを、分かる言葉で投げかけ、話し合いに積極的に向かう姿勢が持てるように援助していきたい。

また、話し合うという経験は必ずしもクラスで集団集まった時に行うのではない。友達との遊びや生活の中で互いの意見を聞いたり、一緒に考える場面も現れる。相談したり話し合うことの必要を感じ、言葉で表すことの大切さを感じるように生活の中で繰り返し行って行きたい。

クラスで子ども達に発表を求める時

クラスでみんなが集まり「今日、どんなことをして遊んだの?」と質問し、今日一日を振り返るといようなことを行う。教師の問いかけに対し、多くの子が手を挙げる。「今日はたくさん手が挙がっている。」「今日はみんなたくさん遊べたんだ。」と、そこで、自己満足してしまう。「手を挙げた子みんなに発言させてあげないといけないかな。」と思い、発言させる。すると、初めの2、3人の発表は聞くが、その後、聞いている方が騒がしくなってしまう。友達の話に興味を持っていないのである。私の中で「発言が多ければ、活発で良い。とくかく話をさせていれば、それを他の子ども達も聞いて、刺激を受けるのではないか。」という思いがあった。しかし、話をした子の満足感は、ちゃんと聞いてもらえているという確信があって初めて得られるのである。そして、聞く方にとっても、たくさん言葉が飛び交うよりも、あることについて互いに心を寄せて考え合うことができるほうが大切である。人の話を聞きながらイメージを膨らませ、思考する場面を設定できるように、話題を絞るなどの教師の配慮が必要である。

VI 指導の実際

1 研究の具体的な取り組み（検証保育までの流れ）

(1) 学級の実態把握

- ・クラスにおいてもしり込みせず自分の思いをぶつける子と、言葉が少なく表情などを見て感情を読み取る必要のある子など、表現の差が大きい。
- ・集団で手遊びやゲームをしたり、担任の話の聞いたりする時、仲間に入らず個人行動を続ける子がいる。

(2) 言葉に関する年間指導計画の作成

一年を6の期にわけて、期ごとに予想される幼児の姿や、発達の過程を踏まえた話すこと聞くことのねらいを立てた。今井和子(2000)の年齢別「言葉」の環境と活動表と高杉自子(2001)の2年保育教育計画を参考にして、年間計画の作成を行った。また、一人一人の言葉の育ちにより学級の集団においてどのように育つことが望まれることも加えた。実際の保育に生かすために幼児の興味や関心を含め、長期の指導計画を土台に週案、日案の作成を行う。また、あらかじめ立てた計画を念頭にしながら、幼児の実情に応じた柔軟な援助を行うようにする。

(3) 幼児の様子と教師の願いの作成

「幼児の様子」は幼児一人一人の良さや、言葉の面で何が育とうとしているのかを視点にして、「教師の願い」はそれに対応した教師の思い、必要な援助を踏まえて作成した。一人一人に合った援助を行い、集団の中で一人一人を生かすことで、互いがよい刺激となり、育ち合うことができるように、保育に活用する。

表4 幼児の様子と教師の願い(例)

名前	幼児の様子	教師の願い
H男	私語が多く注意散漫なことが多い。竹馬ができたことが自信となり、集まりにおいてもおしゃべりに流されることが少なくなってきた。お話を聞いていない友達に注意をすることも見られる。	さらに、色々な遊びに取り組んで、友達と関わりを深めながら、自信をもって生活してほしい。 集団の中で自制する力がついてきたのでさらに、他児へ伝える力を伸ばしていきたい。

(4) 言葉の指導の意義

① 指導の実際

今までの私の保育実践においては子ども達に、集う楽しさを味合わせていなかったように思う。子どもは話を聞くのが得意ではないと思い込み、語り聞かせる時間をあまり持っていなかった。また、「クラスのひととき」では、自分の思いは伝えるが人の話を聞こうとしない子が主導になってしまったり、教師の一方的な話しで進んでいってしまったりしていた。

② 指導のあり方について

朝、教師からの暖かいあいさつで迎えられ、意欲的に遊び始める子ども達。自由活動においてそれぞれの場所で好きな遊びを通して、発見したことや面白かったなどを言葉で伝え合う、やり取りが行われている。クラスに帰って来て、みんなで集まる嬉しさを感じながら「クラスのひととき」の時間を持つ。それぞれの場所で経験したことや、やり取りの様子を伝え合い、共通の話題について話し合うようにしたい。「クラスのひととき」を本クラスの言葉を育てる重要な場と考え、活動していきたい。

③ クラスでのひとときの過ごし方

表5 クラスのひとときの過ごし方

活動例	援助のポイント
・手遊びや歌など	期待して集まることができるように、教師と子どもの気持ちを通い、みんなが揃ったことを喜ぶ。
・教師によるおはなし (素話、読み聞かせなど)	楽しい話を聞いてみんなで、想像の世界に入る面白さを共有する。話を聞くことの楽しさを味わう。
・遊びの振り返り、話し合い (自由活動において行ったことなどについて子どもの動きをもとに)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが発言する時、教師は言葉を補ったり、まとめたりする。 ・子ども全員に発言させようとする、聞く方も飽きてきて、集中できなくなる。ポイントを絞って発言させる。 ・子ども達の遊びの中で、明日につながっていくような遊び、次に展開していくような遊びを取り上げる。

季節や行事などの周囲の環境の変化や、生活の流れを考慮しながら、クラスのひとときのあり方を考え柔軟に対応する。

④ おはなしを行うことの意義

おはなしは、絵本の読み聞かせやパネルシアター、ペープサート、または教師の声だけで語られる素話など色々な形態で行われる。教師自身が楽しんで表現し、幼児が聞くことは楽しいと思える活動を繰り返し行うことによって、聞くことの良さを味わうことができる。教師がおはなしを行うメリットと、おはなしを聞かなかで育つことを木村はるみ(2005)は以下のようにしている。

表6 教師がおはなしを行うメリット

①	子どもの生活全般に関わり、一人ひとりの子どもを良く知っている。
②	おはなしをする機会をたびたび持つ。
③	おはなしをする時間を選べる。
④	同じ話を子どもの要求に応じて、繰り返し話す機会がもてる。
⑤	子どもの再現を助け、その子の内面を知ること、子どもの育ちを手助けできる。

表7 おはなしを聞くなかで育つこと

- ① おはなしの筋に沿って聞いていくことによって、理解力、想像力が育つ。
- ② おはなしに身を入れて聞くようになるにつれ、感情の同化や共感することを体験する。
- ③ おはなしの筋を追うことによって、思考力、論理性が養われ、徐々に抽象思考もできるようになる。
- ④ 能動的に聞くことによって集中力が養われる。
- ⑤ 友達と一緒に聞くことによって、おはなしへの共感だけではなく、友だちとの共感も体験し、仲間関係の形成をも助ける。
- ⑥ おはなしのなかで使われる語彙や言い回し、日本語のリズムや美しさに気づく。
- ⑦ おはなしのなかに含まれる、メッセージを受け取ることもできる。
- ⑧ おはなしによる、浄化作用（カタルシス）の体験が、思考的にも情緒的にも人間を大きくする。
- ⑨ 話し手である大人とのコミュニケーションを助ける。

⑤ クラスのひとつときにおける話し合う、伝え合うことの意義

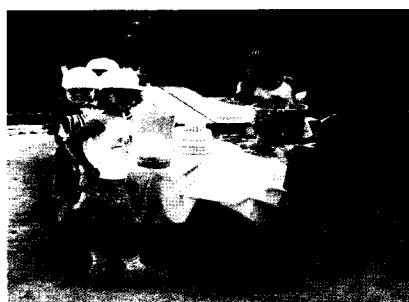
クラスには自分を受け止めてくれる教師がいて、一緒に遊んだ仲間がいて伝えたい友達がいる。クラスは幼児が最も安心して自己発揮できる場であり、社会生活を体験し、みんなで一緒だからできたということを学ぶ場でもある。話を聞いてもらえた子は、「自分を受け入れてくれて嬉しい。」、聞いた子も、友達の体験したことに興味を持ち、「自分もやってみたい。」という気持ちを持つようになる。言葉を通して一緒に考えることで思考が深まり、刺激を得て遊びや生活も広がっていく。

(5) 保育計画

回	月日（曜日）	行事	保育活動（言葉に関して）
1	7月1日（金）	絵本貸し出し	イメージを膨らませながら壁面製作（セミの折り紙、幼虫）を楽しむ。
2	7月4日（月）	中学生職場体験、子ども朝会	他者を受け入たり、身近な人と積極的に話すようにする。
3	7月5日（火）	英語であそぼう、笹飾りづくり	短冊に思いを込め願いごとを自分なりに表現する。
4	7月6日（水）	プール	ルールを守り楽しくプールを楽しみながら、会話を交わす。
5	7月7日（木）	▼ 七夕まつり、流しそうめん	友達と会話を楽しみながら食事する。
6	7月11日（月）	子ども朝会、クリーンデー	集中して担任外の人のお話を聞く。
7	7月12日（火）	英語であそぼう	母国語以外の言葉に親しむ。
8	7月14日（木）	検証保育、インターシッブ交流	外来者をお客様を喜んで迎えてあいさつする。



「おれが、とったせみみる。」



「あわたてしてるよ。」



「ちょうちょがてにのった」

2 検証保育指導案（平成 17 年 7 月 14 日 木曜日）

(1) 幼児の実態

① 全体の集いの中で

本学級は明るく伸び伸びと生活を楽しみ、遊びの中での言葉のやりとりも元気がある。その反面、「クラスのひととき」などに全体で話を聞いたりする時に、集まるという意識に乏しく、参加しなかったり、集まっても私語が続くなどの状態が多かった。そこで、幼児の興味や関心にあった内容の読み聞かせや、語り聞かせを工夫することによって、「クラスのひととき」や全体で話を聞く時に意欲的に集ってくるようになってきている。

② あそびの中で

7月になってセミの鳴き声につられるように戸外に出て行き、毎日、セミや蝶に関わったり、絵本を通して、虫の名前を知り、種類別の特徴や違いにも気がついてきたようである。今までは、どの蝶を見ても「ちょうちょだ。」と言っていたが、「あれ、かばまだらだー。」名称で呼ぶようになったり、変態していく様子を興味を持って見守るようになった。S男、E男、M男、I男は特に虫採りに夢中になり、様々な発見をしている。今までは採るだけで満足する様子もあったが、絵本で取ってきた虫を調べたりする姿が見られるようになった。

(2) 「クラスのひととき」について

① 教師の方針

ア 教師が今日の子どもたちの遊びを見て、「今日〇〇ちゃんたちが、あんなことしていたよ。〇〇ちゃん、みんなの前で教えてくれる。」などと投げかけることで、子どもに話すきっかけを与える。共通の遊びについてやりとりをすることにより、子ども達の心が繋がり、心が育ち言葉も育っていく。また、話す人だけではなく聞く人も、「それ、私も明日やってみたい。」と思いながら楽しんで聞くことができる。

イ 読み聞かせや語り聞かせによって、和やかで楽しい雰囲気をつくる。また、しりとりや言葉遊びをしながら言葉が豊富になるように働きかける。

② 子どもたちの「クラスのひとときの」捉え

「クラスのひととき」を、子どもたちはそれぞれの遊びの場で経験したことを紹介したり、感動を伝えあう場として認識してきている。採ってきた昆虫を「今日みんなにみせたい。」という声がきかれ、主体的に参加する姿も見られるようになった。紹介の仕方にも工夫が見られクイズ形式にして、みんなに問いかける子が現れた。それを受けて、聞いている方も興味を持って質問をしたりする。共通の話題について受け手と話し手の役割を意識しながら、やり取りするようになってきた。夏真っ盛りの今、子ども達が興味を持つ蝉について話題が集中する。

(3) 保育の視点

① 友達と試したり工夫したりして、自然に関わって遊ぶ。

② 遊びの中で、友達と自分の思いや考えを言葉で表現し、会話をしながら進めていく。

③ 自分の思いや考えを相手を意識しながら、伝える。

④ 話しての立場になって思いやりの心をもって聞く。

⑥ 互いの話を聞いて「やってみたい」「試してみたい」と興味や意欲を持ち、明日に期待を持つ。

(4) 表8 言葉に関する保育の年間計画		第I期(4月～5月中旬)	第II期(5月中旬～6月)	第III期(6月～7月)	第IV期(8月～10月)	第V期(10月～12月)	第VI期(1月～3月)
幼児の姿	新しい生活に対して不安と期待感がある。	好きな遊びを見つけて、関わっているうちに言葉が交わされ、新しい友達が増えてくる。	〇〇しよう、〇〇みたくて、何とそれぞれ想像を伝えあいつつ表現を楽しみ遊びを進めている。	友達同士の話ぶつきが深まり、何人かの固定のグループが現れる。友達の様を認める姿も見られる。	運動会を鑑賞し、みんなが褒められる、何ができるかという気持ちがみられる。ルールのある遊びに取り組みたり、運動遊びを意欲的にするようになる。	運動会を鑑賞し、みんなが褒められる、何ができるかという気持ちがみられる。ルールのある遊びに取り組みたり、運動遊びを意欲的にするようになる。	お遊戯会を鑑賞し、みんなの前で表現したいという意欲がみられる。もうすぐ一年生という自覚が見られるようになった。
発達過程	●新しい生活のはじまりの中で教師や安心できる友達の中で自分を出すようになり安定していく時期	●友達と一緒に遊ぶ中で相手を感じながら自分の動きをするようになる時期	●気の合う友達との遊びの中で自分の思いを出したり、相手を受け入れたりして遊びを進めていく時期	●友達を受け入れられたり自己主張したりする中で葛藤を味わいながら自分の力を発揮する時期	●友達関係を深める中で相手のよさを受け止めながら自分のよさの課題をもって取り組むようになる時期	●互いの力を認めあいが、協力して遊びや生活を進める時期	
言葉によって	安心感を得る	安心して自己を表出する	周囲を受け入れながら自己発揮をする	相手と思いを調節する	自己存在間や有感をもつ		
育	基本的な信頼感を育む	自分の生活を確立する	少し我慢をすることの大事さを知る	自己をコントロールする	相手を思いやる		
聞く・話すのねらい	話している人を見て、話が聞けるようになる。→ 聞く態度を身につける。 (教師との対話で安定し、親しみの気持ちを持って話を聞きたいと思えるようになる。)	話している人を見て、話が聞けるようになる。→ 聞く態度を身につける。 (友達の存在を感じながら、話を聞こうとするようになる。)	話している人を見て、話が聞けるようになる。→ 聞く態度を身につける。 (教師や友達の話に興味を持って聞き、取り入れようとする。)	話している人を見て、話が聞けるようになる。→ 聞く態度を身につける。 (自分の気持ちをはかるように伝えようとするように自分の気持ちをはかるように伝えようとする。)	話している人を見て、話が聞けるようになる。→ 聞く態度を身につける。 (日常のあいさつや、質問、報告などを適切な言葉で行うようになる。)	話している人を見て、話が聞けるようになる。→ 聞く態度を身につける。 (相手が聞きやすいような適度な声量を考えながら話をするができる。)	話している人を見て、話が聞けるようになる。→ 聞く態度を身につける。 (思っていることを言葉を整理して伝える。自分たちの生活に必要なことを相談しようとする。)
教師の援助、環境	一日の生活の中で静かにお話を聞く時間を設け、楽しみになるように、話す内容や時間を配慮する。 日常生活の中で教師と子ども、仲よしの友達同士がじっくり会話をするとときや場を設ける。 子どもの話を、ゆったりと聞き子どもが安心して話せるようにする。 子どもたちの興味を引き出す絵本、ぜひ読み聞かせたい絵本を、いつも棚に入れておく。 子どもたちの興味・関心にあつた絵本や、お話をできるようにする。	ごっこ遊びや行事に必要なものを作ったり、書いたりすることができるように環境を用意する。 ごっこ遊び(手紙ごっこ、買い物ごっこ、学校ごっこ)などにおいて、文字を書いて遊べるような環境を用意する。 クラスのひとつときにお話を聞いてみんなが話を聞くことを喜び、クラスのひとつときにおいて共通のテーマで話し合う。	自分たちの生活や遊びを通して伝えたいことを絵や文字で表現する。(絵本づくり、紙芝居づくりなど)	みんなまで話し合いながら、考えをまとめるような取り組みを行う			

(5) 表9 平成 17年度(週案) 7月11日(月)～7月15日(金)

<p>幼児の姿</p>	<p>○七夕の由来を聞き、短冊に書く願いを熱心に考えていた。自分についての願 いだったり、家族や友達を思っ書いて書いたものも見られた。 ○戸外ではセミ採りが盛んである。「せみにおしっこかけられたことがある。お しっこは逃げる時にするんだよ。」などと遊ぶ中で発見したことを教師に伝え たりする。 ○どろだんごをつくって「さわって、硬くなってるよ。」と自慢して見せたり、 作ったものを大事に飾っておく姿が見られる。 ○もうすぐ一学期が終わるということを知り、残念そうにする子もいる。しか し、夏休みに行う「夕涼み会」の話を知り、「浴衣着て来ていいの?」と教師 に聞いたたり、友達と夕涼み会について話をして楽しみにしている姿が見られ るなど、夏休みに期待している様子も伺える。</p>	<p>ねらい・内容</p>	<p>○動植物に関心をもち親しみをもつて遊ぶ。 ○友達と工夫しながら、試したりして遊ぶ。</p>
<p>日</p>	<p>11日(月) 12日(火) 13日(水) 14日(木) 15日(金)</p>	<p>て</p>	<p>○夏の自然に触れるような絵本の読みきか せを行う。 ○クラスのひとときにおいて、遊びの中か ら、子ども達の発見したことを伝える機 会を設ける。</p>
<p>日程</p>	<p>9:45 片付け 10:00 子ども朝会 ☆絵本返却</p> <p>9:00 英語で遊ぼう 10:45 片付け ☆弁当会</p> <p>9:20 プール:1,2組 10:20 プール:3,4組</p> <p>☆検証保育, 弁当会 9:45 片付け 10:00 クラスのひととき</p> <p>☆クリンデー 飼育小屋(3組) ゴミ拾い(1, 2, 4組)</p>	<p>☆</p>	<p>☆保育参観, 講演会, 懇 談会</p>
<p>予想される活動・保育者の思い</p>	<p>☆ねらいと環境及び配慮事項☆ ～動植物に関心をもち、思いやりの心を育てるよう～ (室内) かばまだら、おおごまだらの幼虫の飼育、飼育観察図鑑を見るコーナ (戸外) うさぎや鶏、亀の世話、虫取り、花の水やり、朝顔栽培など ～友達と一緒に工夫しながら協力して遊べるよう～ (室内) ままごとコーナー、大型積み木、製作コーナー (戸外) 砂場、石鹸キー作り、赤土泥団子作り、たけうま ～友達と一緒に体を動かして遊べるよう～ (戸外) 竹馬、フラフラープ、リズムに合わせて踊るコーナー * 子ども達が友達と工夫しながらより深く遊びこめるように、素材や道具も遊びに 応じて適切に用意していく。 * 教室で読み聞かせなどを通して動植物に興味や関心を抱き、親しむ気持ち が持てるようにする</p>	<p>☆</p>	<p>☆保育参観, 講演会, 懇 談会</p>
<p>歌</p>	<p>・ゴーゴーゴーヤーでGO ・ごきげんき ・ヤッホッホッホー夏休み ・大きなかぶ ・楽しい夏休み ・セミくんいよいよこ んやです</p>	<p>絵本等</p>	<p>保育参観, 夕涼み会 の手紙, 夏休みのし おり, クラスだよ</p>
<p>歌</p>	<p>・靴の片付け方の再確認 ・水着, 着替えの着脱や片付け ・動植物に関わった後の手洗い ・水分補給</p>	<p>慣生活安全</p>	<p>その他</p>

(6) 表10 1組の生活プラン

本日の生活の流れ

8:30 8:45 9:45 10:00 10:45

<p>○登園する</p> <p>○花に水をやる</p> <p>○飼育動物の世話をする。</p>	<p>①好きな遊びをする</p> <p>・どろだんごを作って遊ぶ</p> <p>・しゃぼんだま</p>	<p>○かたづけ</p> <p>②クラスのひととき</p> <p>○手遊び</p> <p>○絵本を読む「はらぺこあおむし」</p>	<p>○次の活動へ</p> <p>○しりとりにゲーム</p>
---	---	---	--------------------------------


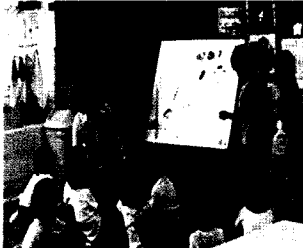


①好きな遊びをする

<p>前日までの幼児の姿</p> <p>○ だろだんごをつくる</p> <p>「どうやってつくるの?」「はじめはどろどろのつちをまわめて、むこうのさらさらのつちをかけるわけ。」「こんなにおおきくつくったら、くずれるよ。」などと教えあう姿が見られるようになった。</p> <p>○ 虫取り</p> <p>・E男が「ちようちよは7分持っていたら、死んでしまう。」「おれ、計ったことがある。」また、土の地面に空いた、穴の直径を草を物差しのようにして、大きさを比べながら「これは、(小さいから)中にせみがいる。」「これは、(大きいから)もういないよ。」と予想しながら話していた。</p> <p>・U男, W子, K子も「まだ、せみ捕まえたことがない。捕まえたい。」と昆虫に興味を示すようになる。</p>	<p>予想される本日の生活と指導内容</p> <p>○ 加える水の量や土や砂の性質を考えて、友達とどちらのだんごが堅くなるか比べたりしている。</p> <p>○ 教師も一緒に活動しながら、子ども達に投げかけていくことで、この虫はどんなエサを食べるのか?どこに多くすんでいるのかなど、より細かい視点で昆虫を見るようになる。</p> <p>・セミや幼虫を虫眼鏡で見たり、図鑑を見たり、絵を描いて楽しんでいる。</p>	<p>指導の要点・環境の構成</p> <p>○ 教師にどろだんごの作り方を聞いてくる子には「お友達に習いに行こう。」とできるだけ、子どもに説明してもらおうようにする。必要な道具が使い易いように配置する。</p> <p>○ 虫取りが活発に行われるだろうが、虫取り網の奪い合いや乱暴に扱うことがあから進めていくようにする。</p> <p>子ども達が昆虫について調べたいことがすぐ見つけられるように、目に付く場所に辞典などを用意しておく。</p>
---	--	--

② クラスのひととき

<p>○ 今日の遊びについて話し合う</p> <p>・S男, I男, 「早くみんなに見せて、弱っているから、返したい。」とせみの扱いの変化が見られた。</p> <p>「このせみの名前はなんだろう。」とクイズしてせみを紹介する工夫が見られた。</p> <p>聞き手も「どうして、クマゼミっていうんですか。」と質問をしていった。それを受けてS男は「クマミたいな色をしているから。」と答えていた。</p> <p>・Hさん, 「この虫は、夜泣く虫ですが、なんとという虫でしょうか。」</p> <p>↓</p> <p>「どうやってとったんですか?」と質問を受ける。</p>	<p>予想される本日の生活と指導内容</p> <p>・Sさん, Iさん達の話を聞いて、虫取りの遊びが活発に行われ、それについての発表が行われる。昨日を同じ内容のクイズにならないように、違う角度から、深まった問題を出すようになる。</p> <p>・自分に対しての質問を受けたら「〇〇さん、どうぞ。」と指名することができるようになる。</p> <p>・手を挙げて答える時、静かに手を挙げて答えることができる。</p> <p>・しりとりにゲームで人形を用いて行うことにより、楽しく言葉遊びを楽しむ。</p>	<p>指導の要点・環境の構成</p> <p>・子どもの自分なりの表現を認めながら、目の前にいる人に分かるように伝えることを意識させる。</p> <p>・「おもしろいところに気がついたね。」など子どもなりの発見を認め、さらに視点が深まってくるようにする。</p> <p>・友達の話に興味を持って質問する姿に「話を一生懸命聞いてくれて、〇〇さん嬉しいだろうね。」と声かけする。</p> <p>・声小さく聞く場合やうまく伝わら</p>
---	--	--

(7) 表 11 一日の生活の流れの中における言葉の指導

一日の流れ	環境構成及び指導上の留意点
<p>登園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつをする ・持ち物の始末をする ・朝の活動をする <p>* 生き物の世話 * 草花の水やり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・健康状態を把握するために、顔を見てあいさつをするようにして朝の出会いを喜ぶ。 ・教師間であいさつを交わす姿を見せたり、教師からあいさつをしていくことで子ども達が自然にあいさつを交わすようになる。 ・「おはよう、先生あのね。」など、その子なりのあいさつを受け止めながら、一日を期待して始めることができるようにする。 ・子どもと会話を楽しみながら生き物や草花の世話をする。
<p>好きな遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虫採り・しゃぼんだま ・色水あそび・どろだんご ・たけうま 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに「何をしているの?」と聞くのではなく「先生も一緒にやっついていい?」と遊びの中に入っていきようにする。 ・子どもが発見したりしたことを言葉にしたり、イメージを言葉で伝え合っている様子を捉えて、遊びがより豊かになるようにしていく。 ・「これも混ぜてみようか?」「どんないろになるかな?」など、子どもと試したり工夫し、子どもと感動を共有しながら、教師もいきいきとした表現をするようにする。
<p>片付け(友達と協力して行う)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「きれいにして、今度はお部屋で〇〇しよう。」と次の活動を期待しながら、片付けができるようにする。
<p>クラスのひととき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手遊びや歌をうたって集う楽しさを味わう ・教師の読み聞かせや語り聞かせ  <ul style="list-style-type: none"> ・今日の遊びを話し合う 	   <ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇くんたち、虫のこと詳しいね。お話聞かせてくれる?」などと、子どもの発言を受け止め、みんなの前で伝える場を与えるようにする。 ・子ども達が遊んでいた様子を具体的に話したり、教師の感想を伝えながら、聞いている子ども達ももっと話を聞きたいと思えるように、話題を投げかけるようにする。
<p>お弁当</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・「きょうのお弁当はだれが作ってくれたのかな?」「みんなのいただきますが、おかあさんにも聞こえたらいいね。」「〇〇くんの、おばあちゃん、お弁当おいしく食べているかな?って家で考えているかもね。」など、子どもたちと会話する。 ・友達とテーブルを囲み会話を楽しむようにする。
<p>降園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身支度を整え ・明日連絡事項を聞く。 ・絵本や手遊びを楽しむ ・あいさつをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡事項等を、「大事な話だから、しっかり聞こうね。」と必要感を持って聞くことができるように促す。 ・落ち着いた気分で降園できるように、絵本や手遊びを通して子ども達と心を通わせる。 ・教師や友達と「気をつけて帰って、明日も笑顔で会おうね」という気持ちで、さよならをする。

3 検証保育を終えて

(1) 保育者の反省

- ・クラスのひとときにおいて子どもから、ちょうに関しての発言がたくさん出ていたが教師に余裕がなく、それをまとめたり、他の子どもに伝えるなどの援助が充分できていなかかった。
- ・自由活動において子ども達がパネルシアターをやっていたので、みんなの前で発表をしてもらったが、教師が遊びの中に入って深く見ていなかったので、どんな段階にあるのか把握していなかった。まだ、全然練られていない段階で発表させるのは早かったのではないだろうか。
- ・友達がパネルシアターの準備をしている時に、子ども達が期待して待つことができたことに成長を感じた。
- ・絵本の読み聞かせや手遊び、語り聞かせなどの技術面を、もっと時間をかけて磨き、向上させていくことが課題である。

(2) 指導助言

- ・クラスのひとときにおいてのねらいで「明日につながる遊びを取り上げて、それについて子ども達が互いに言葉を交わすようにする。」という視点はとても良い。
- ・一日の遊びの中で言葉をしっかりと汲み取って、他の子ども達に伝えることが大事。
- ・様々な体験の中で子ども達は色々な発言をしていた。豊かな体験を無意図で行うのではなく、言葉で表したりしながら確実なものにしていくようにする。
- ・クラスのひとときの時間に、子ども達からいっぱい体験談が出ていたが教師が汲み取っていなかった。「ちょうちよがとまる花は何？」などと、いい発言をしていた。それを教師が聞き取っていなかった。質問をした子の声を教師が大事にして拾えてなかったなので、発表した方も質問した方にとって不発な結果になってしまった。教師は自由活動においてメモ用紙を持って、子どもの発言を書き留めるようにする。「あの子がこんな発言をしていたよ。」と教師間で共有することが大事。そうすることによって、子ども一人一人を生かしていくことができる。戸外活動で出てきた色々な言葉や表現をより豊かになるように育てていくようにする。
- ・今回読んだ「はらぺこあおむし」はほとんどの子が知っていたので教師が読んでいる時も、覚えていて声に出している子もいれば、自分でメロディーをつけて歌っている子もいた。絵本はすべて教師が読みあげることもあるが、子どもとのかけ合いで話を進めていくこともある。今日みたいなみんなに馴染みがある本は、あおむしが食べた食べ物子ども達に言ってもらったりと、読み方の工夫を図る。
- ・子ども達にさせたパネルシアターは少し早すぎた。今の段階は教師が見本をたくさん見せてあげる段階。そうして物語には筋道があることを子ども達は知っていく。教師がやっていることをまねて、できるようになっていく。
- ・遊びの中で子ども達はたくさんのことを発言していた。くまぜみとあぶらぜみの特徴を的確に説明していた。「あぶらぜみのはねはあぶらみみたいな色をしている。くまぜみは羽が透明で幽霊みたい」と表現が豊かである。
- ・聞く態度の悪い時は、きっぱりと切ることも大事。「今日はこの話やらない。」「ちゃんとできていないので今日はだめ。」等の言葉をだしていい。メリハリを出す。
- ・園全体でその場に合った行動ができる子どもに育てていくようにする。
- ・一人一人を育てながら集団を育て、集団を育てていく中で一人一人を育てていく。

4 事例を通して

(1) 幼児の様子と教師の願い

名前	幼児の様子	教師の願い	事例
S男	自分の思いが通らないとかんしゃくを起こして、泣くことがあったが自分の言いたいことを話すだけでなく、相手の言葉にも耳を傾けるようになってきた。	教師の思いを聞いてくれるようになったことを認め、さらに友達の話もよく聞けるようになって欲しい。	1
I男	自分の思いや考えを口にすることが少なく、全体での集まりの時、周囲の状況を考えずに遊び続けることがある。	I男と会話を多く持ち信頼関係を築いていくようにして、互いの気持ちに気付いていけるようにしたい。集団の一人であることを意識して欲しい。	2
Y男	集まりの時に気持ちの切り替えがなかなかできず、周囲を意識せずに自分のしたいことを続けることがある。教師の声に耳を傾けないことがある。	自分本位な面があるので、友達と協力しながら遊びを進めていけるようになってほしい。話を聞く楽しさを味あわせるようにしたい。	2
U男	集団で集まる時や、初めてのことをしたりする時、不安になるようで部屋を出ることがある。そのような時、教師に自分の気持ちを伝えることができない。	教師と一緒に活動することで不安な気持ちを少なくし、楽しみながら色々なものに挑戦していくようになって欲しい	3
W子	人の話を聞く時に楽しそうにとってもいい表情をする。教師に話しかけることはあるが、友達と関わって遊んだり会話をするのは少ない。	教師を通してW子の言葉や良さを伝えていくようにして、友達と関わりを持って遊べるようにして欲しい。	3
M子	落ち着いていて状況を考えて行動することができる。友だちに遠慮してしまい、自分の気持ちを抑えてしまうことがある。	自分で考えてみんなのために動いたりする様子をみんなに伝え、生活の中でM子が自分に自信を持てるようにさせたい。	4

(2) 事例1 S君とのかかわり

7月1日

蝶を捕まえて、S男：①「せんせい、ちょうって7分さわっていたらしぬんだよ。」「おれ、しらべたことがあるからわかる。」

7月7日

S男：②「せんせい、ちゅうがくせいのおしえてもらった。」、木の下の穴を指差して「このなかにせみのようちゅうがいる。」という。S男は土の地面に穴がたくさんあるのに気付いて、穴の直径を草の茎に合わせて計りながら「あっ、これはいる。これはいない。」と指差しながら伝えていた。教師：「どうして、いるか、いないか分かるの?」、S男：③「これ、あながおおきいから、もうでている。ちいさかったらまだでてないっていうこと。」

7月14日

S男：④「せみのはねはあぶらみたいないろをしている。くまぜみのはねはどうめいで、ゆうれいみたいないろをしている。」

事例1より

①毎日好きな昆虫採集を行い、虫に多く関わっているうちに様々な発見をしている。経験で得たことを、「7分」くらいという感覚で表現している点がおもしろい。

②S男が他者と会話をしながら教えてもらったり、教え合いながら遊びを進めている様子が伺える。自分の興味や関心のあることに対して、意欲を持って取り組んでいる。

③S男の感性の豊かさが感じられる。実際のせみをよく観察し、図鑑や絵本などで得た知識と結びつけて的確にせみの特徴を言葉で表現している。言葉を使って考え、表現している様子がわかる。

(3) 事例2より 1男とY男の関わり

7月4日

自由活動の時間に昆虫を採るのが大好きな1男とY男を、教師：「秘密の場所に連れて行ってあげる。」と2人がまだ行ったことのない、昆虫の多い場所に連れて行った。あまり人がいないので手の届く高さにセミがたくさんいる。1男もY男もとても喜びセミ採りに夢中になる。片付けの時間になったので、2人に声をかける。教師：「虫たくさん捕まえたね。今日これみんなに『自分達で採ったんだよ』って紹介しよう。」「そして、お弁当もここに食べに来よう。」と言う。いつもなら、「もう、かたづけいやだー。おれ、いかん。」という2人だが①1男：Y男：「うん。」と素直に応じてくれた。クラスのひとときが終わったら、外に行ってお弁当が食べられるという約束を期待して、最後まで静かに会に参加することができた。

7月7日

自由活動において、1男：②「また、じかんがあつたらつれていってよ。」と教師に話しかけてきた。片づけが終わり1男とY男が取ってきたせみを虫かごに入れて部屋に集まってきた。1男とY男：③「せんせい、はやくしょうかいしたい。そしたら、もうよわっているから、かえしにいきたい。」

7月11日

Y男が取ってきたセミを虫かごに入れて、自分の傍においていた。教師が「虫かごはお道具棚の上において来て。」と声をかけた。Y男：④「だいじょうぶ、おれのそばで(せみが)おとなしくはなしきくから。」と言って離れたがらない。しかし、クラス全体でセミを手を持ったまま集まりに参加したり、虫かごをいじったりして、セミが逃げ出し部屋中が大騒ぎになることが続いた。そこで、子ども達と相談した。「なぜ、集まりの時に手に何も持たない方がいいと思う？」という質問に対して「ふざけるきもちになるから。」などの意見が出て、話を聞くときは手に持っているものを片付けるようにしようということになった。

7月12日

Y男はいつものようにかごを虫かごに入れて、部屋に入ってきた。自分の隣に虫かごをおいて参加しているので、「Y君、虫かご片付けて来てくれる？」という⑤Y男：「わかったよ。」と言って片付けに行った。

事例2より

- ①自分達に特別に関わってくれたということで、教師に対して親近感を覚え言葉を受け入れてくれきた。また、思いっきり虫採りに没頭できたので満足した様子が伺える。
- ②自分の気持ちを素直に教師に表すようになった。自分の思いだけをぶつけるのではなく、全体の流れや集団を意識している様子が分かる。
- ③「クラスのひととき」に主体的に参加するようになった。虫に対しての優しさも感じられる。
- ④自分のとった虫に対して、愛着を持っていることが分かる。
- ⑤自分も話し合いに参加していて、そこで決まったことだから、素直に約束を守ってくれた。直接教師がかごを片付けるように言うのではなくて、「Yくん集まりの時はどうするんだった？」などと本人に気付かせるような言葉かけをしても良かったのかもしれない。

(4) 事例2 U男とW子とのかかわり

7月12日

教師：「一緒に虫さがしにいかない？」とU男とW子を誘う。M男：①「せみとってみたい。」友達が取るのをしばらく見ていたが、あみを持っていないので高い所のセミは採れないと思ったのか、小学校の花壇の方へ行く。

とうわたがたくさんあり、たくさんの種類の蝶が飛んでいる。U男は止まっている蝶を捕まえて②「はじめて、ちょうちよつかまえた。」と嬉しそう。教師：「これ、とうわたっていうんだよ。名前にわたが付いているから、本当にわたができてる。」W子はわたを触って「本当に手にくっつく。」と笑った。③「これなんかクイズに出せそう。」教師が「わたを入れる袋がないな。持ってこればよかった。」と言うと、④「まっててよ。とりにいく。」園舎に走って行き、笑顔で綿を入れるビニール袋を持って戻る。

その後、野菜が植えられている畑に行き、みんなでおもしろい形のへちまを発見して一緒に笑う。W子とU男は互いに名前を呼び合ったりしたが、初めて聞いた。園舎に帰りながら、U男が⑤「いっぱいたんけんしたね。」と繰り返し話す。U男は他のクラスの担任にも⑤「きょう、U男たち、とおいところたんけんしにいつてきた。」と報告していた。

事例3より

①あまり外遊びをしなかったU男だが、クラスのひとときにおいて、他の友達から刺激を受けて自分もやってみたいと思ったようだ。教師に自分の思いを伝えてくれた。まだ、「あみをかして。」と言えないようである。

②、⑤、⑥U男は自分も捕まえることができ、感激した気持ちを表現している。楽しく、誇らしかったことを伝えたい様子が伺える。

③、④W子は初めて見た、とうわたのわたが自分達だけの発見であることを喜び、誰かに伝えたいという思いを持っているようである。クラスのひとときに他の子の発表を見て自分もしてみたいと生活の見通しや連続性をもっている。



(5) 事例4より M子とのかかわり

7月5日

クラスのひとときにおいて、教師がたなばたについての素話を行う。うさぎが友達のことを思って短冊にお願いごとをかくという内容のものであった。真剣に話を聞いてくれていた。その後、クラスで短冊にお願いごとを書いた。M子が教師に書いたものを見せに来る。M子は①「S子に友達ができますように。」と書いてあった。理由を聞くとM子：②「S子はわままだから、ともだちができにくいからおねがいがした。」、M子自身のお願いはあるのかなと少し気になったので、教師：「お友達のことお願いしたんだね。もっとお願いがあったら書いてもいいよ。」と声をかけた。2枚目の短冊に③「みんながたのしくなりますように。」と書いてあった。

7月6日

S子が登園してM子は嬉しそうに話をしている。集まりの時も隣同士に座っている。以前にもまして、ずっと一緒に楽しそうに遊んでいる。

事例4より

①、②M子とS子はよく一緒にいるが、教師から見るとS子がよく指示する場面が見られ、M子が受身になっているようで気になっていた。S子は今日休みであるが素話を聞きながら、S子のことを思い出し、客観的にS子を捉えながら友達であるがゆえに思いやっているのかもしれない。

③広い視点でものごとを見ている様子が受け取れた。「みんな」という言葉に自分も含んでいるのかもしれない、M子の控えめさとやさしさが感じられた。昨日一日S子が休んでいたことで改めてS子のことを考えて、S子の良さも見えてきたのだろう。互いに大事な友達と意識したようである。

IX 研究の成果と課題

1 研究の成果

幼児が自ら生活を展開し、言葉を含め総合的に発達するための必要な経験を、積み重ねていくことができるようになるための、教師の姿勢や具体的な手立てを学ぶことができた。これからも、幼児教育の重要性を胸に、保育実践や研究に励んでいきたい。

- ・ 幼児の言葉の多様性や発達の過程を学ぶことができ、個に応じたねらいや援助のあり方を考え実践のあり方を研究することができた。
- ・ 子どもの言葉を通して教師間で子どもたちの育ちを共有し、園全体で幼児を育てていく姿勢を再確認することができた。
- ・ 子どもの言葉を育てていくために、充実した園生活を送ることの重要性が分かり、計画的に環境構成をする方法を学んだ。
- ・ 保育実践や検証保育の中において幼児の言葉を育てていく活動を実践して、子ども達の中に言葉で豊かに表現する姿が見られるようになった。

2 今後の課題

- ・ 園生活で多様な体験を通して言葉を育てていくように、環境や活動を工夫し、常に見つめ直していく姿勢を持つようにする。
- ・ 幼児の喜んで話したり聞いたりして言葉で表現することを楽しむ力を育てていくことは、長期的な発達の過程で捉えていくことを考慮し、チーム保育や保育カンファレンスの充実を図っていくようにする。
- ・ 幼児が園での生活において様々な発言をして、充実した生活を送る様子を園内だけではなく、家庭や地域に伝えていくようにする。

3 終わりに

研究を進めるにあたって、ご指導、ご助言を賜った沖縄キリスト教短期大学の大湾由美子先生、当研究所所長の玉城勝秀所長、上原等先生、研修の機会を与えて下さった嘉数幼稚園園長の宮城盛雄先生、副園長の中真艶子先生、嘉数幼稚園の教諭の皆さん、検証保育に協力して下さった栗国奈津美先生と1組の子ども達に心から感謝申し上げます。さらに縁あって共に研究の日々を過ごすことになった當眞嗣郎先生、宮城隆英先生、いつも笑顔で励まして下さったはごろも学習センター職員 みなさんに深く感謝申し上げます。

〈主な引用文献と参考文献〉

- 岡本夏木 『幼児期』 岩波新書 2005
- 小田豊・芦田宏・門田理世 『保育内容 言葉』 北大路書房 2003
- 福沢良彦・入江礼子 『保育内容 言葉』 健帛社 2005
- 今井和子 『保育実践 言葉と文字の教育』 小学館 2000
- 木村はるみ 『乳幼児のことばを育てる』 雲母書房 2005
- 柴崎正行・戸田雅美 『教育課程・保育計画総論』 ミネルヴァ書房 2001
- 日本国語教育学会 『ことばの学び手を育てる 国語単元学習の新展開 生活のことばからの保育Ⅶ 幼稚園・保育所編』 東洋館出版社 1992
- 大場牧夫・高杉自子・野村睦子 『今、見直そう保育の実践』 ひかりのくに株式会社 1988
- 無藤隆 高杉自子 『保育講座 保育内容 言葉』 ミネルヴァ書房 1990
- 古堅幼稚園 『古堅幼稚園教育要覧』 2003
- 仲本美和 『園児の豊かな育ちのための学級経営～家庭との連携を中心に～』 具志川市立教育研究所 2005